ローカルメディアカ

男木島図書館

香川県高松市

小さな島の「本のある場所」で新しい本が生まれていく

瀬戸内海に浮かぶ男木島で2016年（平成28）2月に開館した「男木島図書館」は、島に移住してきた夫妻が設立したマイクロライブラリーだ。この場所から生まれた冊子には島の人たちの暮らしが記録されていた。

1 豊玉姫神社の境内からは島も海も一望できる。2「最初持ち込んだ本の重みで床が抜けたので、設計士に頼んで床下に土台を入れました」と額賀さん。3 福井大和さんと額賀順子さん。福井さんは「NPO法人 男木島生活研究所」の理事長としても活動している。

高松港からフェリーで40分乗ると、男木島が見えてくる。港の後ろにはすぐに山が迫っている。その上にあるのが豊玉姫神社で、海岸近くにある加茂神社と並び「夫婦の神社」と呼ばれている。

拝殿に続く急な階段に息を切らしていると、「2年に一度の夏祭りでは、人が乗った屋台を担いでここを上るんです」と案内してくれた額賀順子さんが言う。神社からは島全体の様子が見渡せる。

男木島の人口は約160人。うち40人がUターン・Iターンなどの移住者という。額賀さんもその一人だ。大阪の大学で、男木島生まれの福井大和さんと出会って結婚。2014年に娘と三人で男木島に移住した。島では子どもの数が減ったため小・中学校は休校していたが、福井夫妻が中心となった署名運動により再開した。

「再開校当時、Uターン3世帯の子どもたちが通い始めましたが、彼らが卒業してまた休校という事態にしたくなかった。それで移住したいという人を支援する場所がつくれないかと思ったんです」

島のコミュニティセンターに小さな図書室があるが、住民に利用されていなかった。そこで、本好きの順子さんが所蔵していた2000冊をもとに図書館を開くことに決めた。廃屋になっていた一軒家の権利を取得し、1年間かけて改修した。NPO法人を設立し、SNSで工事を手伝うボランティアを募集。クラウドファンディングで蔵書の購入と本棚をつくる資金を得た（図書館については本誌33号で紹介）。

現在の蔵書数は約5000冊。小説、エッセイなどの読み物が中心だが、瀬戸内海に関する本も集めている。男木島出身の作家である西村望・西村寿行兄弟の作品も並んでいた。

カフェを併設し、図書館の前には「老人と海」と名付けた広場もある。「島を訪れた人が休憩したり、地元のお年寄りが立ち寄る場所になっています」と順子さん。写真の展示、トークやライブなどのイベントも行う。

開館した16年2月には、『男木本』も創刊。島についての資料が少ないことから、島の人たちの生活を記録しようと考えた。創刊号の特集は「僕たちは男木島で暮らすことを選んだ」。20代で島に移住し、漁師として働いている2人の男性にインタビューしている。

先輩漁師から彼らへの「やってみてダメやったときでも、笑って切り替えるぐらいの余裕はないと。そんな気持ちで、自分で漁を開発していけぃ！」という厳しくも温かい言葉がいい。

「間が空いてしまいましたが、来年春には2号を発行予定で、いま島のお年寄りにお話を聞いて回っています。また、男木島の歴史を書いた本を復刻したいとも考えています」

本がある場所で人が結びつき、そこから新たな本が生まれる。とても自然な流れだと感じた。

（南陀楼綾繁）

4『男木本』VOL.1　男木島図書館発行・企画制作　頒価500円（税込）。編集長は現在、新潟市で写真集専門書店を営む小倉快子さん。
5 左から『島暮らしガイドブック』（男木島生活研究所発行）。展覧会の図録『著者近影』『なみまにひびく』。問合せ先 https://ogijima-library.or.jp/

取材協力＝特定非営利法人　男木島図書館　撮影＝著者